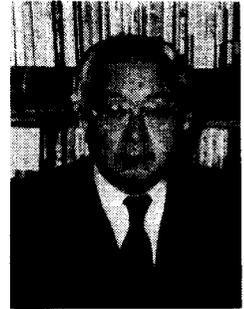


会長退任のごあいさつ



近藤 次郎

昭和59年に本学会の第15代の会長に就任して2年の任期を終え、このたび退任することになりました。この機会に誌上を借りて会員の皆様にごあいさつを申し上げます。

私は歴代の先輩の築かれた路線に沿って本学会を運営して参りました。すなわち、まず国際化を重視いたしました。特にアジア諸国に呼びかけて、APORSを結成いたしました。1985年3月筑波で第1回の理事会を開催しました。これには横山前会長の基金を使いました。このときには韓国、中国、香港、フィリピン、シンガポールおよびオーストラリアの諸国の参加を得てめでたく発足し、伊理副会長などのご努力でIFORSのサブグループとして公認されました。また本年からはシンガポールの学会誌を正式にAPORSの会誌とすることが決まり、汎太平洋地域で独自の学会活動ができることになりました。今年はおอสเตรเลียで第2回の理事会を開くことしております。次第に実りのある活動成果があがってくるものと期待しております。

さらに昨年夏、米国ワシントン市で行なわれた第11回IFORSには会員諸氏が大勢参加され、日本の学会活動と学問水準の高さを世界に示すことができました。

次に本学会は日本学術会議の構成学会として正式に承認され、学会員の中から会員を選出することができました。また同時に、日本品質管理学会、日本経営工学会と横の連絡を緊密にし、経営工学関連学会協議会(FMES)を結成して何度も会合を重ねました。その活動として昨年の7月に

は、日本学術会議の講堂において三学会連合シンポジウムを開催し、本年もひきつづいて7月11日に第2回を行なう予定で準備をすすめております。企画や運営については特に佐久間副会長などにご協力をいただきました。

森村副会長には三学会協同で新しい科学研究費の分野を確立することなどを試みていただきました。未だ機が熟さず見送られることになりましたが今後も学術会議を通じて努力して行かなければなりません。このためには大学等におられる会員の各位が積極的に科研費の申請をして、実績を積み重ねておく必要があります。

学会は何としても会員増強が大切でありますのでOR思想の普及と新会員の獲得に努力いたしました。最近はお学生会員がふえて新しい顔ぶれがずいぶん目だってきたのは心強いことですが、一方、学会発足時の会員諸氏の中には停年などを迎えられる現場から引退される方もふえ退会されますので、入会と退会が毎年200名前後あり、差引きとしては会員増加はわずかに留まりました。これからはソフトの研究がもっと拡大されますので大勢の方々が入会されることを期待しております。

一昨年12月および本年3月には国際経営経済会議(ICEM)を学習院大学等と共催して、その中にORに関する特別セッションを設けることができました。いずれも盛況で、その内容が日経新聞に大きく掲載されましたから、ORの普及にも役立ったのではないでしょう。

第二次大戦後40年の間に世界の経済はいちじるしい変化をとげました。すなわち戦争直後の重化学工業から、省資源省エネルギーが叫ばれて、企業は他の分野に転出することを余儀なくされました。このような変化に柔軟に順応して、そのつど体質を変化してきたことが、日本の経済が今日、自由主義国家の中では第2位の地位を占めるようになった原因であると考えられます。それは重厚長大からスモールイズビューティフルといわれる軽薄短小に体質改善をしてきました。さて、これから先はどうなるということは、はなはだむずかしい予測の問題です。現在のコンピュータや光ファイバー通信や衛星通信などの発達を見てみると、やはり、21世紀はソフトの時代になると予想されます。そこでSoft is beautifulまたはSoft is idealということになるでしょう。日本人は元来温和な気候に恵まれ平和に暮しています。日本の景色は荒々しさがなくソフトです。平安朝以来の文学にしても芸術にしても、その特色はやわらかさにあります。したがってソフトを拡大解釈すれば21世紀は日本の世紀といえます。日本人の物の考え方が広く世界に行きわたる時代になると思います。このソフトはコンピュータの発達にもなるもので、数理に裏づけされ、曖昧さを含まないものでなければいけません。このように考えるとオペレーションズリサーチに対する期待は大きく、さらにその将来は洋々としていられると考えられます。

話は少し変わりますが、今年1月28日にアメリカ合衆国フロリダ州ケープケネディから打ち上げられたスペースシャトル、チャレンジャーは打ち上げ後わずか74秒で大爆発をおこしました。この惨事はアメリカ人はもとより世界中の宇宙航空技術者に大きな衝撃を与えました。レーガン大統領

はただちに事故調査委員会を組織し120日以内に報告を提出するよう要求し、もっかその委員会が精力的に原因調査に当たっています。現在までにわかったのは右側の固体ロケットの継ぎ目から火炎が洩れて主タンクの中にある液体酸素、液体窒素を誘爆したものとなっています。そのような洩れがおこったのは異状寒波によるロケットの継ぎ目のOリングのゴム状有機物質が低温で変質したためといわれています。しかし、このような技術的欠陥はすでに製造会社のモートンサイオコール社の技術者のあいだではよく知られており、NASAにもたびたび報告しているところでありました。問題は打ち上げ当日の異状寒波で事故の危険があるにもかかわらず技術者の中止の議論がNASAの最高責任者まで届いていないという組織や管理に問題があるといわれています。すなわちスペースシャトルの爆発は結局ハードの問題でなくソフトの問題ということになります。ORはこのような問題を研究しています。

21世紀を展望して日本に対する期待がますます大きくなっています。特にこれから世界に学術の進歩にも責任をもつ必要があります。わが国から新しい理論を外国に送り出し、それによって人類の幸福、福祉、世界の平和を増進するように努力しなければいけません。われわれオペレーションズリサーチの研究者に課せられた責任は、はなはだ大きいものがあります。

次期は日立製作所会長の吉山さんがお引き受けくださることになりましたので、本会も飛躍的な発展をすることを考えております。2年間は過ぎてしまえば短いように思いますが、未熟な小生を支援して下さった会員諸氏、評議員、理事、監事の方々、事務局の諸姉、また顧問の小田部氏に厚く感謝いたします。

× × × × ×